



# からくり儀右衛門展

平成 25 年 11 月 30 日<sup>土</sup>  
～平成 26 年 1 月 16 日<sup>木</sup>

前回の展示では、弟子たちや家族の証言をもとに、久留米出身の天才技術者・発明王とも称される田中久重の人柄や生き方などをご紹介します。今回は、久重が生まれ育った故郷に残る「ゆかりの地」を巡ってみたいと思います。

## ② 生誕地～③ 五穀神社界隈

久重は、江戸時代終わりの寛政 11 年（1799）、久留米城下の通町十丁目で生まれました。家業はべっ甲細工師で、幼名を岩次郎といいます。通町は、城下町の中を東西方向に延びる当時のメインストリートでした。通り沿いには「うなぎの寝床」の町屋が軒を並べていました。

生家にほど近い通外町の東に隣接して五穀神社があります。境内では、春と秋に盛大な祭礼が行なわれました。祭礼には、たくさんの屋台や見世物小屋が並び近隣から多くの人々が集まりました。特に人気を集めたのは、八つに分かれた城下の町掛りがそのできばえを競う「からくり人形」の舞台でした。

久重も工夫を凝らし、様々なからくり人形を上演しています。得意としたのは、水の圧力や落下を利用する「水からくり」です。ひとりでに人形が踊り、笛を吹いたりする仕掛けに人々は驚嘆し、惜しみない喝采を送りました。



◆生家跡に建てられた②生誕地記念碑



◆久重も渡ったであろう③五穀神社の石橋

## ④ 久留米藩製造所跡（御井町）

京都・大坂での活躍後、佐賀藩に招かれた久重は同藩の近代化に大きく貢献し、その名声を聞きつけた久留米藩へ呼び戻されます。まず、<sup>やりみず ふりゅうでん</sup> 鑕水古飯田に工場が造られ、そこで最新の西洋式大砲をモデルに青銅製大砲を製造しました。

慶応 2 年（1866）春、藩主はじめ藩幹部が見守る中、古飯田台地上から完成した大砲の試射が行なわれました。的は飛岳山腹。勢いよく発射された砲弾は、目標をはるかに超えて飛んでいきました。この大成功に、久重はじめ製造所の役職員は皆、大声をあげて喜び合いました。



◆製造所があった高牟礼市民センター前の④記念碑（左）と古飯田台地上から見た飛岳（右）。右地図参照。

## ⑥ 久留米製鉄所（南薫町）

慶応 3 年（1867）、工場は久重の生家裏付近に移されました。ここでは久留米藩が採用していた西洋式の小銃を模造しました。製品のできばえに藩主は大変喜び、更に 2 万挺もの追加生産を命じました。

工場が手狭となったため、明治 2 年（1869）に南薫へ移転します。ここには 2 棟の建物が東西に並び、長崎で購入した<sup>せんぼん</sup> 旋盤も 3 台据え付けられました。機械の動力として蒸気機関を利用し、従業員は百余名にのぼったといいます。

しかし、明治 4 年 7 月、廃藩置県となると、その事業も停止となりました。その後も、各種機械の製造を続けましたが、明治 6 年 1 月、一家や弟子たちを連れて、久重はついに上京するのです。



◆久留米製鉄所の記念碑（左）と当時の雰囲気が残る製鉄所前の狭い路地（平成 20 年頃）。奥は応変隊屯所跡（右）

※注 場所・施設名に付けた○番号は、地図の○番号と対応しています。

※注 当時の「製鉄所」とは、鉄鋼を造り出す工場ではなく、鉄製品を製造・修理する工場のことを言いました。